～水守～

Huron

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～水守～

【Ｎコード】
Ｎ７０１６Ｑ

【作者名】
Ｈｕｒｏｎ

【あらすじ】
「そなたの人生・・・私にくれぬか？」
とある理由で水守として生きていくことになった少年
その日常を描くお話である。

水守～その一～

「綺麗・・・」
率直にそう思えるほど美しい湖を見つけてしまった。
周囲を背の高い木々に囲まれて、それでも日の光を受けて水面は輝いており
水は泳ぐ魚が浮いているように見えるほど透き通っていた。
素晴らしい場所を見つけた。
面白いモノを探すために山奥を探検していたが
やみくもに山を駆け走っていたらこの湖に辿り着いてしまっていた。
僕はしばらく感動に浸った後、カバンを置いて服を来たまま飛び込んだ。
今の季節は夏
そして夏休みの初日であった。
暑い中走って走って汗を掻いていた僕は
湖を見つけた瞬間から飛び込みたくてしょうがなかった。
泳ぎ自慢でもある僕は、日が暮れるまで無我夢中に泳いだ。
それからも毎日ここで泳いだ。
そして夏休みが終わる頃だった。
いつものように一人で泳いでいた僕の前に

気がつくと薄暗い洞窟にいた。

体育館ほどの広さであった。
周りを見渡すと天井に開いたマンホールほどの穴からから
太陽の光が射しこんでおり多少明るかった。
洞窟の中を見回していると
海の波のような水の音が
梅雨は反射的に水の音がした方向を見る。
その水音は先ほどの蒼い龍が立てたものだった。
龍は地面に開いた直径２０ｍの
大穴から上半身を出していた。
その姿をみて梅雨は
「あぁ・・・・」
と声を出してしまった。
別に怖かったわけではない。
ただアニメや漫画などでしか見たことのない
存在が目の前にいてとても驚いたのだ。
「・・・大丈夫か？」
龍が話しかけてきた。
女性の声だった。
「い・・・一応・・・」
と梅雨はいった。
「よかった・・・死なれては困るのでな」
「どして？てか何者だよ」
「私はこの湖の水守・・・この湖を守っているものだ」
「えっと・・・僕何か悪いことした？」
「別にそなたが悪行をしたわけではない・・・
頼みがあるのだ」
「頼み？」
「そなたの人生・・・私にくれぬか？」
「えっ？」
「私は人として生きてやりたいことがある。

そのためにも、そなたの人生がほしいのだ」
「えっと・・・どゆこと？」
「・・・つまり私がそなたに変わってこれから
生きていくと言っているのだ。
もちろんただとは言わぬ、
私の力・・・そなたにくれてやろう」

梅雨はその話を聞き考えた。

今自分は人生の分かれ目にいる・・・
それぐらいは僕でもわかる。
どうしよう・・・
それよりも龍と平然と話す自分がすごいと思う・・・
なんでかな・・・不思議な気持ちだ。

「聞きたいことが・・・」
「なんだ？」
「えっと・・・やりたいことって何？」
「・・・日の国の水を守りたい・・・」
「えっ？」
「私が聞く話では、最近海や川が汚れていると聞く。
江戸の川や海は人も泳げぬほどのゴミだらけ・・・
私はそれが許せんのだ・・・
だからといって・・・
人に裁きを下すわけにはいかぬ・・・
ならば・・・人として最も偉い地位に立ち、
日の国の水を救ってやりたいのだ」
「・・・そう・・なんだ・・でもなんで僕？」
「そなたがこの湖を泳いでいてわかった。
そなた水が好きであろう？」

たしかに・・・僕は水が好きである。
水に浸かっていること自体が快感であり、
水そのものが好きであった。そのことを仲間にいったら
変わったやつ、もしくは変態といわれてしまった。

「でも・・・なんで僕の人生をやらないといけないの？」
「・・・さっきから聞いてばかりであるな・・・
そんなに人生をくれてやるが嫌か？」
「嫌ってわけじゃない・・・ただ知りたいだけ・・・」
「・・・まぁよい・・・答えは簡単よ・・・
突然身元も知らぬものが学問を学ぶ
場所に行っても学問を学べるか？
身元を知らぬものが偉き地位に
立っても民が信じてくれるか？
そなたのように身元があるものならば、
実績を残せばそれでよいのだ・・・
ここ最近のそなたたちの話聞いていたぞ・・・
もうそろそろ受験というのがあるらしいな・・・
そこでよき学校とやらに行けばよき
仕事に就けるのであろう？
私も少しばかり情報を集めてきた・・・
よき学校に行けば・・・
偉き地位に行くのも無理ではない・・・
私は人の人生を得てよき学校に入り偉き地位に立つのだ」
「・・そゆこと・・・」
「で・・・どうなのだ？」

梅雨は再び考えた。
そして・・・

「わかった。いいよ。僕にそんな学力はない、
別にいままで学校で悪いことはしてないし、
提出物はちゃんと出してたし学力あれば
いけるんじゃないの？」
「そうか・・・ありがとう・・感謝する」
そういうと龍その穴から出てきて近づいてきた。
そして頭を梅雨の頭に近づけた。
すると梅雨の頭と龍の頭の間から光が発した。
梅雨はまぶしくて目をつぶった。
そして目を開けると、目の前に自分がいた。
「お前にはちゃんと力を与えた・・・
これでこれからそなたが水守だ・・・
力の使い方は瓢(ひさご)に教えてもらうがよい・・
あらかじめ教えておくよう頼んでおる。
ではさらばじゃ」
そういって梅雨は穴に飛び込んでいった。
「・・・俺は間違ってなかったんだよな・・・
今日から水守か・・・瓢って誰だ？」
水守は先ほど梅雨が飛び込んだ穴に近づいた。
穴を覗くと水がある。
あそらくあの湖とつながっているのだろう。
その時、水守は水に映る自分の姿に驚いた。
先ほどの蒼い龍になっていた。

水守～その二～

たった今さっき僕は水守となった。
その決断に後悔はない
なんせ大好きな水と暮らせるのだ。
毎日泳いで夜は水の中から星を見るつもりだ。
ただ・・・この姿はないだろう！
水面に移る僕の姿・・・
それは紛れもないさっきの蒼い龍だ
でもさっきの龍とは少し違うところがある。
まず目の色が先祖代々続く僕の蒼い眼だ
それに体の大きさも僕のほうが少し大きい
細かく言うと僕は３ｍぐらいだろうか？
体の表面の蒼というより紺色の鱗はとても綺麗である。
正直見ていてかっこいい

水守は水面に写る自分の姿をじっくりと見ていた。
時折体を動かし、様々な所を見ていた。
不思議と体を動かすのに違和感はなかった。
まるで人の体のときのように自在に動かせるのだ。
しかし、腕などがないのは不便であった。

「どうしよう・・・」
前の水守・・いや今は梅雨だった・・
とにかく梅雨がいったとおり力の使い方を瓢という
誰かに教えてもらわないといけない
でも・・・瓢って誰？

水守がそう考えていたときだった。

「水守様・・・水守様・・・」

声が聞こえてきた。
老人のような声である。

「えっと・・・どこ？」
「こちらでございます。水の中にございます」

水守は地面に開いた大穴を覗き込んだ。
水中に何かいる・・・
鯉である。
体長８０ｃｍはある黒く大きな鯉であった。

「えっと・・・君が瓢？」

水守はその鯉に向かってそう話しかけた。

「さようでございます。私が瓢にございます。
前水守様よりお力の使い方を教えるよう言われました。
どうぞこちらへ・・・」

瓢はそういって水中の奥に潜っていった。
水守もあとを追うようにして
そこに飛び込んだ。
大きな水柱が立った。
水中で体を壁にぶつけた。
痛かった。

「大丈夫でございますか？」

水の中で瓢が目の前にやってきた。
こうみると案外小さい・・・
いや自分が大きいだけか・・・

「うん・・一応大丈夫・・・でも
まだこの体には慣れてないかな・・・」
「さようでございますか・・・
人の姿なら動きやすいにございますか？」
「まぁ・・・うん」

「では先に人の姿の戻る方法を教えます」

そういって瓢は僕にそのやり方を教えてくれた。
初めはよくわからなかったが
瓢の教え方が今まであった先生の中でも
とてもわかりやすくて２０分くらいして
やっと人の姿に戻れた。
前の自分の姿と変わらなかったが、
水着ではなく時代劇に出てきそうな
蒼い和服を着ていた。
この服は？
と瓢に聞くと

「その服は貴方様の服にございます。
貴方様が来ていた衣は前水守様が持っていかれましたし
その服ならば水の抵抗もありませぬし
それに邪魔にもならないと思います」

たしかに着ていても不思議と服の感覚はない・・・

まるで服を着ていないかのような感じであるが
感覚はなくても服の存在というのは
見なくても不思議と感じた。

「その衣も自由自在に出すことができます」

瓢は僕に服の出し方や消し方を簡単に教えてくれた。
それが終わり、僕と瓢はその穴の奥に泳いでいった。
泳いでいるときに気がついたことがあった。
僕はさっきから息継ぎをしていないにも関わらず
苦しくなることがない・・・
むしろ水の中で息をしている感じであった。
またゴーグルをしていなくても
水の中がよく見えた。
他にも水の冷たさを感じなかった。
実際あの湖を泳いでいたときは微妙に水の温度が冷たかった。
それでも泳げていたのは太陽の光が暖かかったからだ。
これも水守の力なのか・・・

まるでホースの中を通っているよう筒状の洞窟を
数分泳ぐと前に光が見えた。
今気づいたことがあった。
さっきまで自分が通っていたところに光はない。
真っ暗な水の中自分は通ってきたのだ。
なのにまるで真昼の影の中の暗さのようだった。
水守の力・・・どれほどあるのだろう・・・

とうとう洞窟の外にでた。
一瞬明るすぎてまぶしくなり目をつぶったが
しばらくして目を開けるともうその光に慣れていた。

そして目に映った光景は美しかった。

メダカが群れを作って泳ぎ、
大きな魚も優雅に泳いでいる。
自分がゴーグルから通してみていた
世界とは大違いだった。

「水守様・・ここでお力のご説明をいたします
その前に・・・お名前をお聞きしてもよろしいですか？」
「えっ？水守が名前じゃないの？」
「水守は湖を守るものに付けられる
称号のようなものにございます」
「そうか・・・名前・・名前・・・」

名前といっても・・・梅雨って名前は
もうあいつのものだし・・・

「今水守様がお考えになられていることはわかります。
ならば新しいお名前を差し上げましょう。
こうなったときのためにと前水守様から
お名前をいただいております」

「そうなんだ・・・でどんな？」
「はい・・・氷雨（ヒサメ）にございます」
「氷雨？」
「さようでございます。
前水守様が、初代水守様から取って作ったお名前にございます」
「初代水守ってどんな名前なの？」
「初代水守様のお名前は天之氷雨龍神（アマノヒサメリュウジン）にございます。

ついでに天乃氷雨龍神様の説明を申し上げますと、
天之氷雨龍神様は水を操ることのできる神の中では、
上位の神にございまして、
かつて人が森の木を伐ったことで山神様がお怒りになり
森や大地が焼けてしまったときに
そのお力で恵みの雨を降り注ぎ、天之氷雨龍神様の友である
天之四季神様（アマノシキガミ）のお力で、
新たな森が生まれました。
そしてもう一柱の友の天之彩歌神（アマノサイカシン）様の美しい歌声で
山神様のお怒りを沈めたのでございます。
そしてその時に負われたお怪我を癒すために
この湖にやってこられました。」
「歴史ある湖なのか・・・じゃあ
その名前をありがたくもらうことにするよ、
それにしても色々知っているんだね。」
「ただの物知り爺にございます。
長く生きているゆえ・・・」
「どれくらい？」
「初代水守様の時代からにございます」
「・・・つまり瓢は不死ってこと？」
「さようでございます。
でも貴方様もこれから不老不死でございますよ」
「えっと・・・喜ぶとこなのかな・・」
「それはその者しだいにございます。
長く生きていることが苦痛の者もおれば、
長く生きて幸せな者もおります」
「そうなんだ・・・一応聞くけど瓢を不死にしたのは
やっぱ天之氷雨龍様なわけ？」
「さようでございます、
私は前水守様がここに参られたときに

前水守様を見守るようにと天之氷雨龍様に
頼まれまして、こうして不死となったのでございます」
「そうなんだ・・・
前水守様のことも聞きたいけど、
今聞いてばかりだと日が暮れそうだからまた今度にするよ」
「さようでございますか・・・
ではお力の説明をさせていただきます」

その後僕は瓢に色々な力を教えてもらった。

まずは簡単に龍の姿に戻る方法、
基本的にちゃんとした水守の力は、
龍の姿じゃないと使えないらしくて、
明日から龍の姿に慣れるよう努力するつもりだ。

あと姿を消す方法、
やっぱ人に見られるとうるさいことになりそうなんで、
洞窟の外に出る際は姿を消しておかないといけないらしい。

他は水に関する力だった。
雨を降らしたり、
水をきれいにしたり、
水を操ることもできるらしい。

そんな説明の中、今日の一日が過ぎた・・・・・・

水守～その三～

あれから二日後・・・
僕はまだ水守としての力をコントロールするために
日々鍛錬中である。
今やっと水を自在に・・・といっても完全ではないが
とりあえずコントロールできるようになった。
ちなみに夜はよく空を見る。
この湖に夜に来たことはなく、
こうしてみると星が町よりとてもキレイだ。
水の中から見るとよりキレイに見える。
気がつくと寝ていたりする。
そして瓢に起こされる。
瓢に教えてもらった水守の仕事として
毎朝に湖を浄化することだ。
浄化といっても魚の糞といった湖の汚れを
湖から取るだけである。
水をコントロールする鍛錬には
もってこいであり、
汚れを水で包んで森の近くに置くのである。
おいておくといつの間にか誰かが持っていっている。
瓢によると森神の使いが
森のエネルギーとして持っていくらしい。
いつか森神と会うことになりそうだ・・・
そんな流れで今日もまた一日が過ぎる。
相変わらず星がキレイだ・・・

三日目の朝だった。
その日は自分で目が覚めた。

そして水の中で背伸びがてら
に空を見上げていたときだった。
突然目に映る世界から色が消えた。
何が起こったかわからずに拍子抜けしてると
色は戻っていた。
「一体・・・なんなんだろう・・・」
考えが言葉にでる。
いつもの癖だ。
そうすると奥から瓢がやってきた。
「今のは天乃時鳴大神(アマノトキナリオオカミ)様がお力をお使いになられたのです。」
「天乃時鳴大神？」
「時間を操ることができる
最上級神の一柱でございます。
天乃時鳴大神様がお力をお使いになると
神や妖の類の物にしか見えぬ
”時止まり”が起こるのでございます。」
「時止まり・・・
さっきの目の前全てから色が消えたような？」
「さようにございます。
恐らくは先ほど天乃時鳴大神様が
お力をお使いになったと思われます。」
「そうか・・・」
そういって納得したようにうなずいていたときだった。
「久しぶり～」
と声が聞こえた。
陸からだ。
今はちゃんと気配を消している。
「氷雨～」
「・・・」
氷雨は水面から半分だけ顔をだして

恐る恐る声のするほうを覗き見る。
陸・・・
いつも自分がこの湖に来るときに使っていた道の出入り口、
そこには一人の少女が立っていた。
紺色のショートカットの髪型で瞳は金色、
自分がいた中学の制服を着ているところから
中学生だと思われる。
他に周りを見渡すが他に誰もいない。
「氷雨～そんな顔半分だけだしてると怖いよ？
そもそもそんなに気配消せてないし。」
ばれている・・・
氷雨はしょうがなく水面上に出る。
そして水守の力を使って水面に立つ。
「すぐに出てきてよね？
もしかして氷雨じゃない？」
「いや・・氷雨だけど・・・
えっと・・・誰？」
「・・・忘れたの？」
「・・・わからない・・」
「まぁ仕方ないわ、転生してる身だし」
「ますますわからない・・・」
「私よ、そうねぇ・・・
そなたの人生・・・私にくれぬか？」
「えっ・・・まさか！」
「そう、前水守よ」
「えっと・・・なんで女の子になってるわけ？」
氷雨はそう言いながら水面に座る。
少女もまたその場に座る。
「さっき時止まりが起こったのわかるでしょ？」
「うん・・・瓢に聞いたけど・・・」

「その時にね、私はあなたから今の私に転生したの」
「転生・・・？」
「そう・・転生・・
簡単に説明するとに生まれ変わり、
私はあなたという人間を元にして生まれ変わり
私として生まれた。」
「・・・なぁ・・・転生するんだったら
俺の体いらなかったんじゃないか？」
「いいえ？
そもそも私はあなたと入れ替わるとは言ってないわ。
あなたの人生がほしいといったの。
仮に龍の姿で転生できたとしても
人間になる確立はゼロ、
それどころか龍ですらなくなってしまうかもしれないわ。
人の子として生まれるには一度人となってから
転生するしかないの
だから私は人生がほしいって言ったの。
体ではなく人生・・・人の証を」
「それで天乃時鳴大神？」
「そう・・私は時鳴様に貸しがあるから、
普通時間を動かすにはそれなりの代償が必要なの・・・
千人近くの魂や上級神の命・・・
でも貸しのおかげで必要なしでできた・・・
これで私は私として生きていける。」
「それにしても早くないかな？
転生してもう中学生？」
「別に成長が早いわけじゃないわ。
貴方の年代に合わせるために
過去に行ってから転生したの。
時鳴様の力を使えばその時代の誰の子供にもなれるから・・・

でも関係のない人の子供として生まれると
未来が大きく変わっちゃうから、
貴方の親から私は生まれたの
私は私としてね。
だから私は今中学三年生の受験生
って言っても私としての意識を取り戻したのは
中学生になったあたりからなんだけど・・」
「そうなのか・・・
だったら何で前に会いに来なかったんだ？」
「その時貴方いた？」
「えっ？」
「貴方が水守になったのは二日前
私が二日前まで生きてきた世界は
この湖には別の私がいたわ。
貴方が水守になった二日前にやっと貴方が知る世界になったの
まぁ二日遅れたのにも理由があってね・・・
一昨日と昨日は学校だったから・・・」
「そうか・・・」
頭の中に横切る一つの考え・・・
「ということは・・
水無月梅雨という少年はもう存在しないということ？」
「ええ、水無月梅雨はいなくなり、
代わりに水無月雫という少女が誕生した。」
「雫？それが君の名前？」
「ええ、雫っていうの、かわいいでしょ？」
雫はさっと立ち上がってその場で一回転する。
ひらひらと水色のスカートが揺らめく。
「でもそれが人生を手放すってことよ？
あなたは私に人生をくれた代わりに
私はあなたに神の力を与えたわ。

私だって水守という神の座を捨てたんだから。
普通神の座を捨てる神なんていないわよ？」
「そう・・・だよね・・・
僕はこれから氷雨として生きていく。
君は雫として・・・
それで解決だね。」
「ええ、時々遊びにくるから、
湖が汚れてたらただじゃすまさないからね？」
そういって雫は森に消えようとする。
「ちょっとまって！」
「何？」
「何でここにきたの？」
「なんでって・・・説明しておいたほうがいいでしょ？」
そういって雫は完全に森に消えていった。
「これで・・よかったんだよな・・・」
そういって氷雨は水の中に入っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7016q/

～水守～

2011年10月8日13時20分発行